

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：14301  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：22520310  
 研究課題名（和文） ラシーヌにおける人文主義的教養

研究課題名（英文） Racine and Humanist Culture

## 研究代表者

永盛 克也（NAGAMORI KATSUYA）  
 京都大学・大学院文学研究科・准教授  
 研究者番号：10324716

研究成果の概要（和文）：17 世紀の劇作家ラシーヌは少年期にポール・ロワイヤルの「小さな学校」で受けた人文主義教育を通して、古典古代の作品を原語で読み、その要約や抜粋をすること、あるいはそれを自然で優美なフランス語に翻訳することを実践した。古代のテキストの忠実な読解を目指す文献学的厳格さと、自然で優雅なフランス語表現を追求する翻訳の美学との総合がラシーヌ悲劇の創作を可能にしたのである。

研究成果の概要（英文）：17th century French dramatist Jean Racine, through the humanist education he received during adolescence at the "Petites Écoles" of Port-Royal, read european classics in the original languages, making summary and extract or translating them into a natural and graceful French. The philological exactitude in reading ancient texts, combined with the aesthetics of translation which pursue natural and graceful expressions, enabled the creation of Racinian tragedy.

## 交付決定額

（金額単位：円）

|         | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2010 年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2011 年度 | 900,000   | 270,000 | 1,170,000 |
| 2012 年度 | 900,000   | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度      |           |         |           |
| 年度      |           |         |           |
| 総計      | 2,900,000 | 870,000 | 3,770,000 |

研究分野：ヨーロッパ語系文学

科研費の分科・細目：

キーワード：フランス文学 ラシーヌ 人文主義 悲劇 ポール＝ロワイヤル

## 1. 研究開始当初の背景

フランス17世紀の劇作家ラシーヌ（Jean Racine, 1639-1699）についての研究は没後300周年を契機として再度活性化されたといえる。近年の出版物の中で特に重要なものとして (1) Georges Forestier 教授によるラシーヌの詩・演劇作品の新批判校訂版（Jean Racine, *Ceuvres complètes*, t. I, théâtre-poésie, éd. Georges Forestier, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1999）および (2) 同教授による浩

瀚な伝記的研究（Georges Forestier, *Jean Racine*, Gallimard, « NRF Biographies », 2006）、さらに (3) 1999年に行われた記念シンポジウムにおける講演と研究発表を収録した報告集（*Jean Racine 1639-1699, actes du colloque*, eds. Gilles Declercq et Michèle Rosellini, PUF, 2003）を挙げることができる。このうち (1) は初版テキストを採用した点で画期的であると同時に、序論と解説の大部分がラシーヌの劇作法の体系的説明に割かれている点でも重要である。

(2) は現時点で望みうる最も詳細かつ洞察に富んだ作家の伝記研究である。(3) にはラシーヌ研究の多様な可能性が提示されているが、中でも記念講演において Jean Mesnard 教授が示唆した方向性は特に注目に値するものと思われる。同教授はラシーヌ研究に残された課題は作家の生涯全体について統一的な展望を示すことである、と指摘した上で、幼年期から晩年までを結ぶ導きの糸として作家とポール・ロワイヤルとの関係が重視されるべきである、と主張している (Jean Mesnard, « Racine, Nicole et Lancelot », in *Jean Racine 1639-1699, op. cit.*)。 (2) の伝記研究もこの提言をふまえた研究成果であるといえる。なお、この問題に関しては日本においてもすでに塩川徹也教授の論考がある (『ラシーヌとポール・ロワイヤル』、『ラシーヌ劇の神話力』所収、小田桐光隆編、上智大学出版会、2001年)。

ラシーヌの「人と作品」を総合的に理解すること—このような展望において重要だと思われるのは、ポール・ロワイヤル修道院が17世紀のフランスにおけるジャンセニスムの拠点であると同時にキリスト教的人文主義の実践の場でもあった、という事実である。そこでは聖書やその他の古典作品をフランス語に翻訳する活動が積極的に進められる一方、修道生活を送る「隠士たち」の運営する「小さな学校」les Petites Écoles において貴族の子弟たちを対象に特色ある教育が展開されたのである (Frédéric Delforge, *Les Petites Écoles de Port-Royal 1637-1660*, Cerf, 1985 を参照)。ラシーヌは少年期をポール・ロワイヤルで過ごす機会に恵まれたのであるが、この「小さな学校」で受けた人文主義的教育が後年の劇作家としての成功、さらには完成されたオネットムとしての宮廷での栄達の素地を形成したのではないか—この仮説を検討する価値は十分にあると思われる。問題を文学に限っていえば、ラシーヌの悲劇作品の正確な理解のためには作家の文学的素養が培われた知的・文化的背景を視野に入れる必要があるのではないか—これが本研究の出発点にある問題意識である。

人文主義教育にはいくつかの側面があるが、17世紀のフランスにおいて、言論に関するあらゆる技術の基盤であるレトリック (弁論術・修辞学) が重要な位置を占めていたことはいうまでもない。実際、20世紀後半のレトリック研究の復興および進展と軌を一にして、ラシーヌ悲劇と修辞学との関係が重要な研究テーマとして認識されるようになった。Peter France 教授の *Racine's Rhetoric* (Oxford, Clarendon Press, 1965) は作家が有し

ていた修辞学の知識とその悲劇作品への応用を体系的に検証した初めての個別研究である。また、以前より Gilles Declercq 教授がラシーヌ悲劇とレトリックの関係について発表してきた一連の研究は特に重要なものであると考える。

## 2. 研究の目的

ラシーヌにおいて悲劇創作の基礎を成しているのは少年期にポール・ロワイヤルで修得した人文主義的教養ではないか、という仮説のもとに、「小さな学校」の教育方法を検証し、ラシーヌが修学時代に残した古典作品の抜粋・注釈・翻訳等の自筆稿資料を吟味する。古代のテキストの忠実な読解を目指す文献学的厳格さと、自然で優雅なフランス語表現を追求する翻訳の美学との総合がラシーヌ悲劇の創作を可能にしている点を明らかにし、ラシーヌの古典古代の作品に対する態度と文学的伝統の意識の源泉を人文主義的教養の中に位置づけることが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

ポール・ロワイヤル修道院付属の「小さな学校」における人文主義教育の特色を同時代の文献・証言資料により明らかにし、その教育法の意義について考察する。まず17世紀における教育方法について概観 (Georges Snyders, *La Pédagogie en France aux XVIIe et XVIIIe siècles*, PUF, 1964 など参照) した後、ラテン語のバイリンガル教育を重視するイエズス会の学校教育とポール・ロワイヤルの教育法—ラテン語作文より羅文仏訳を、またラテン語ではなく母語による知識の習得を重視する方針がとられた—を比較検討する。次に、ポール・ロワイヤルの神学者アルノー Antoine Arnauld が残した『人文学の学習の規則についての覚え書き』*Mémoires sur le Règlement des études dans les lettres humaines* を手掛かりとしながら、個人指導に近い形で行われる学習方法について調査する。

人文主義教育の成果としてラシーヌが身につけた教養やスキルの基本的特徴を探るため、特に古典古代のテキストに関する注解、注釈、翻訳の問題についてラシーヌが残した自筆ノート・草稿資料の調査を行い、修学時代の勉学の成果を跡づける。注解や翻訳に際してラシーヌが原典テキストに対して示す忠実さ、それと同時に追求する自然かつ優美なフランス語表現に着目し、悲劇作品の創作との接点を探る。

#### 4. 研究成果

(1) ラシーヌによるセネカ作品の批判的受容という問題について、近代ヨーロッパに受け継がれたストア主義思想と悲劇ジャンルの関係という観点から考察を行った。文学史的展望と作品分析を総合しつつ、「ラシーヌにおける人文主義的教養」について具体的かつ説得的な例を提示することができたと考え。この成果は論文« Racine et Sénèque. L'échec d'un idéal stoïcien dans la tragédie racinienne »として発表した。

(2) ラシーヌが少年期にポール・ロワイヤル修道院付属の「小さな学校」で受けた人文主義的教育が後の劇作家としての創作活動に与えた影響について、具体的な例の分析を通して明らかにした。まず、修辞学および詩学が準拠する概念である「発想」、「配列」、「措辞」が悲劇の創作の手順を説明する上で有効である点を確認した（「記憶」と「演技」は役者の担当する部分であり、ここでは区別して考える）。その上で、ラシーヌが残した悲劇「タウリスのイフィジェニー」第1幕の自筆「プラン」（梗概）を分析し、ここでは「配列」（劇の筋）と「措辞」（詩的文体）がすでに分ちがたく結びついていること、それがポール・ロワイヤルにおける師の一人であるニコルがある詩撰集の序文で述べている忠告にかなったものであることを指摘した。古典古代の作品を原語で読み、その要約や抜粋を作成すること、あるいはそれを自然で優美なフランス語に翻訳すること—これらの教育的実践を通し、ラシーヌにおいて古典作品の受容が創作へとつながっていく道筋を確認することができた。これらの成果は論文« Les étapes de la composition d'une tragédie racinienne »として *Comment naît une œuvre littéraire?* (Champion) 中に発表した。

(3) ラシーヌが享受した人文主義的教育の中でも、歴史に関する教養は人格の形成とともに後年の悲劇の創作にも大いに資するところがあつたと考えられるため、16世紀～17世紀の人文主義における歴史観について調査を行い、以下のような知見を得た。

17世紀のフランスは前世紀の人文主義から、歴史に道徳的・知的有用性を求める姿勢（歴史の実例＝模範とする考え）を受け継ぐ一方、歴史的事件の原因を考察することも重視した。公的な事件の原因を探ることは権力の秘密を暴くことにつながるが、（ラシーヌが深く親しんだ）タキトゥスの『年代記』が17世紀において評価されたのも、まさに政治的な事件の根底に隠された心理的要因を暴

く点においてである。この点で「歴史」と「伝記」の区別は曖昧なものとなり、（やはりラシーヌが創作の源泉とした）プルタルコスやステトニウスなど私的・個人的な歴史の記述において、分析すべき対象は「客観的」な原因ではなく「主観的」な動機となる。歴史家は「人間の行為を心において解剖」（サン＝レアル『歴史の用途について』）するのであり、人間の心の複雑なメカニズムを解明し、情念の仮面をはぎとる、という点で歴史家とモラリストの親近性が明らかになる（これはラシーヌ劇の特徴でもある）。歴史の因果関係において、一個人の情念（とくに恋愛の情念）が見えにくい形で、しかし決定的な仕方で影響をおよぼしている、という考えはパスカルの「クレオパトラの鼻」という有名な表現に凝縮されているが、このような考え方は同時代においてすでに流布しており、ラシーヌ悲劇にも反映されている。「私的な歴史」への志向は1660年代以降に流行した歴史に隣接するジャンル（回想録と歴史小説）においても顕著であり、フィクションと歴史の混在という問題は悲劇ジャンルとも共通するものである。

上述の問題のうち、特に悲劇ジャンルにおける歴史的テーマが提起した問題について研究した成果の一端を« Histoire et fiction dans la tragédie du XVIIe siècle »としてフランス文学と歴史に関するシンポジウムにおいて発表した。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①Katsuya Nagamori, « John E. Jackson, *L'Ambiguïté tragique* », (*Revue d'histoire littéraire de la France*, 2010, no 4, p. 1015-1016. 査読無)

②永盛克也「*Béatrice Guion, Du bon usage de l'histoire*」(『仏文研究』43号、2012年、69-72頁、査読無)

〔学会発表〕（計2件）

①Katsuya Nagamori, « Histoire et fiction dans la tragédie du XVIIe siècle » (Colloque international « Comment la fiction fait l'histoire – Emprunts, échanges, croisements – », 2011年11月18日、関西日仏学館)

②Katsuya Nagamori, « Cas particulier d'un mécénat artistique à l'aube de l'ère moderne au Japon » (Cycle de conférences « le mécénat à

l'âge classique », Université Nancy 2, フランス、  
2011年3月8日)

〔図書〕(計2件)

①Katsuya Nagamori, 他 *Comment naît une œuvre littéraire? Brouillons, contextes culturels, évolutions thématiques*, éd. Yoshikawa et Taguchi, Honoré Champion, 2011, p. 25-38.

②Katsuya Nagamori, 他 *Les Destinataires du moi : altérités de l'autobiographie*, éd. Kuwase, Masuda et Sempieri, Editions Universitaires de Dijon, 2012, p. 25-38.

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

永盛 克也 (NAGAMORI KATSUYA)  
京都大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：10324716

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし